2023年12月11日
季刊 年4回発行

震災リゲイン Pressプレス

第45号

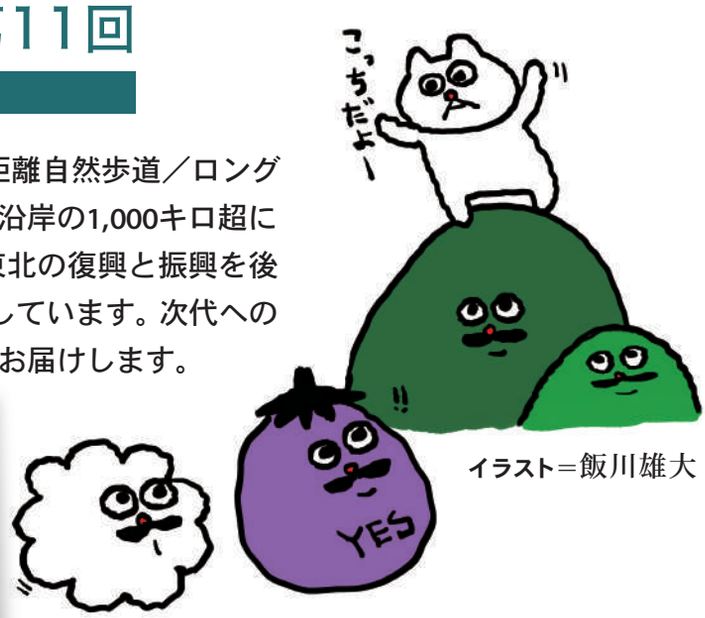
支え合い、備え、いのちをつなぐ

震災復興・防災情報専門メディア 全国4万部配布
発行元：特定非営利活動法人 震災リゲイン
発行人：相澤久美 編集人：内田伸一
編集部：〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6
Tel：03-6277-7640 Fax：03-3560-2047

みちのく潮風トレイルを歩く 第11回

Walking on Michinoku Coastal Trail

「みちのく潮風トレイル（MCT）」は、2019年に誕生した長距離自然歩道／ロングトレイル。青森県八戸市から福島県相馬市まで東北太平洋沿岸の1,000キロ超に及ぶ、自然と町を繋ぎ「歩いて」旅をするための道です。東北の復興と振興を後押しするため環境省が敷設し、4県28市町村、市民が協働しています。次代への願いが込められたこの道を、実際に歩いたハイカーの声をお届けします。



イラスト＝飯川雄大

❶アップダウンも多い岩手県のルート。美しい海が見えると疲れも吹き飛びます（岩手県野田村）

東北を歩いて応援！

今回のハイカー
濱口聡子さん（大分県在住〔歩いた当時は宮城県名取市〕）
出発地：2021年5月29日　福島県相馬市 松川浦（南端）
到着地：2022年10月1日　青森県八戸市 蕪島（北端）
歩き方：週末ごとのセクションハイクで66回。最初は日帰り。自宅から距離が離れてからはホテル利用。
その後：歩いた地域や名取トレイルセンターのイベントに参加。名取トレイルセンターのグリーンメンバーとしてもセンター周辺ルートのゴミ拾いや草抜きの活動に参加。次は、みちのく潮風トレイルの南に続く、ふくしま浜街道トレイルの踏破にチャレンジします。

なぜ歩いたか

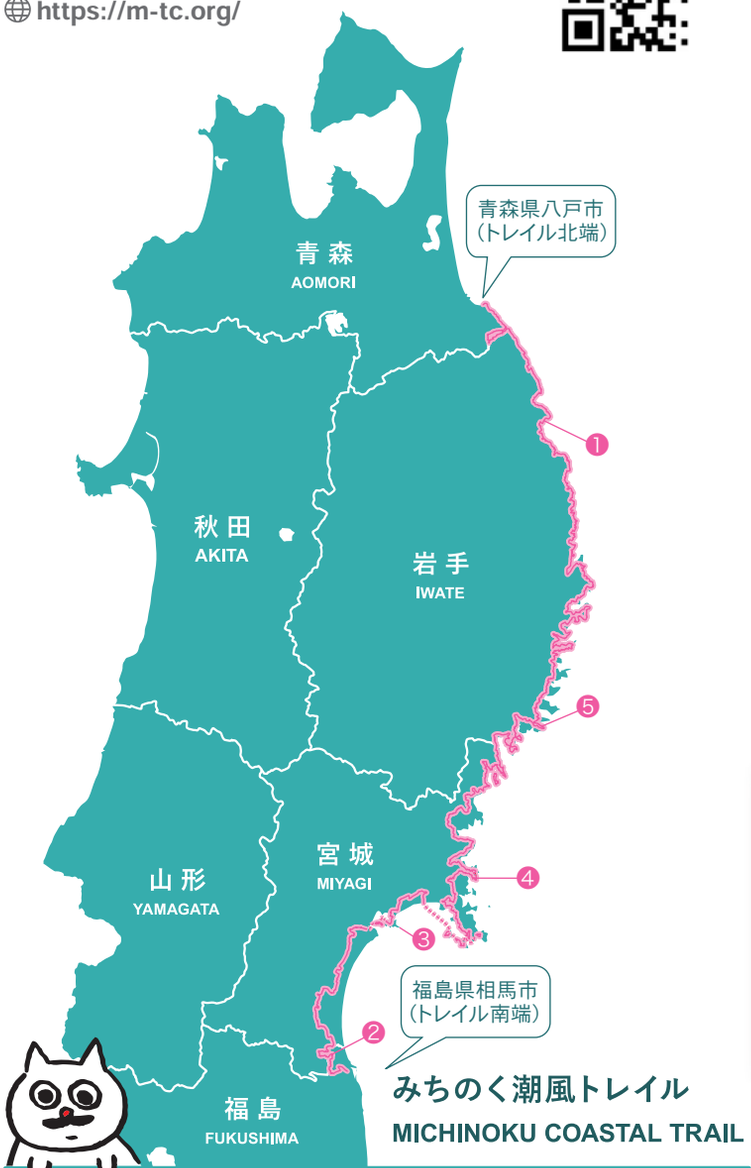
とあるオンラインイベントでみちのく潮風トレイルの全線踏破者のお話を聞いたのが興味を持ったきっかけです。当時はトレイルが何かもまったく知らない状態でしたが、名取トレイルセンターでさらに詳しくお話を聞いて、自然を楽しみながら運動不足を解消できるのは楽しそうだなと感じ、家の近くをちょっとだけのつもりで夫と２人で歩き始めました。美しい自然を感じながらゆっくり歩くことは、心身のリフレッシュにもなり、達成感も感じられるものでした。その日のゴールに到達するたびに次のルートではどんな景色に出会えるのだろうと期待が膨らみ、次もちょっとだけ、またその次もちょっとだけと歩みを進め、いつの間にか週末ごとにリュックを背負い地図を持ちながら歩く生活になっていました。

歩いている間に印象に残ったこと

魅力いっぱいなので簡単には語れませんが、テーマパークの非日常を感じる楽しさとは異なり、ありのままの自然や暮らしにお邪魔させてもらって、その土地の時間の中に自分も混ぜてもらっているような楽しさがトレイルにはあります。例えば、その日のスタート地点まで向かうのに地元の小学生や先生でいっぱいのコミュニティバスに乗ると聞こえてくる楽しそうな学校の様子や、トレイルにはいくつも漁港がありましたが、船の大きさや形が地域によって少し違うなと感じたことなど、歩くスピードで進んでいるからこそ見つける自分なりの小さな発見が楽しみでした。

（➡次ページに続く）

みちのく潮風トレイルを歩こう！
詳しくは▶NPO法人みちのくトレイルクラブ
https://m-tc.org/



みちのく潮風トレイル
MICHINOKU COASTAL TRAIL

みちのく潮風トレイル憲章

4県28市町村を貫く「みちのく潮風トレイル」を多様な人々の間で共有するために策定されたこの憲章は、なぜこの道がつくられ、何のために未来に繋いでいこうと願うのか、の思いや理念が記されています。

1. 美しい風景と風土を楽しむ道とします。
2. 地域に暮らす人々とこの地を訪れる人々との間に心の交流が生まれる道とします。
3. 自然の優しさと厳しさを胸に刻む道とします。
4. 震災をいつまでも語り継ぐための記憶の道とします。
5. 豊かな自然・文化を次世代へ受け継ぐ道とします。
6. 歩くことを愛する全ての人々を歓迎し、皆で育てる道とします。

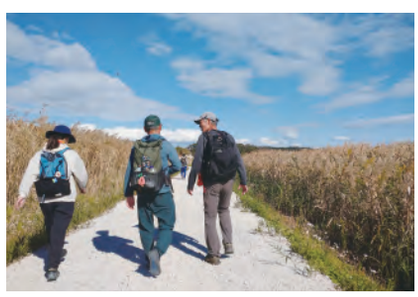
❷鹿狼山の山頂から海の方向を見ながら。ヘトヘトでしたが、開けた景色に感動（福島県新地町）

（➡前ページの続き）

歩き終わってなにを思う

美しい自然や美味しい食べ物、温かな地域の人たちとの出会いだけでなく、震災で大切なものがどれだけ失われてしまったのかを思い、ことばにできない場面もたくさんありました。そうした思いも含めて歩いて感じたことすべて、私にとって大切な宝物です。自分の足で歩いたあの道、あの場所、すべてを故郷のように思っています。

一緒に歩いた夫であっても感じたことはまったく同じではないし、歩いた人の分だけ感じることがあるのだと思います。だからこそ、多くの方にもっとみちのく潮風トレイルを知ってほしい、少しでもいいから歩いてほしいです。歩きにきてくれる人の分だけ、思いが巡って、それがきっと私の大好きで大切な東北がもっと元気になることに繋がっていくんだと信じています。



❸浦戸諸島をみんなで歩く。全線踏破後もイベントに参加して歩くことも。おしゃべりしながら歩くのもとても楽しい（宮城県塩釜市）

❹雄勝半島は、歩くうえでルートの分け方とアクセスに悩んだ地域。美しい漁港が忘れられません（宮城県石巻市雄勝）

❺半島なので両サイドに木の葉が落ちた木々の間からリアスの海岸線や町の様子が見えて感動しました（岩手県大船渡市綾里）

読者プレゼント 以下ご記載のうえ、本紙最終ページ下に記載の編集部宛（ハガキ／Fax／E-mail）にてご応募ください。
①郵便番号・住所・名前・電話・性別・年齢　②よかった記事　③ご感想・ご意見　④本紙をどこで手に取りましたか？

みちのく潮風トレイルData Book 3名
提供：NPO法人みちのくトレイルクラブ
同トレイルを歩く上で役立つ地点情報を満載。

※2024年1月11日締切。当選発表は発送をもって代えさせていただきます。
また個人情報はこの発送以外に使用しません。

知って
おこう

Presented by RQ災害教育センター

災害教育を知る旅

第10回・広島での災害支援
「うまくいかなかった事例・その１」

文＝河野宏樹
1974年広島県広島市出身。NPO法人これからの学びネットワーク 代表理事。NPO法人環境パートナーひろしま 理事長。羽黒山伏。

広島では近年、2014年8月と2018年6月に豪雨災害がありました。いずれもRQ災害教育センターの支部・RQ広島としての活動になりますが、個人的にはこの2回の活動の中でのRQへの関わり方は異なりました。2014年はニーズ調査を含め現場での作業が主な役割で、2018年は拠点の整備や後方支援活動が主な役割でした。これらの活動の中で、社会福祉協議会との連携や大学生のボランティア活動支援といったことが目立った成果として挙げられるのですが、本稿ではあまりうまくいかなかった側面を具体的な出来事をもとに紹介したいと思います。というのも「うまくいかない」ということには普遍性があり、今後の災害支援の現場でも起こりうることだと考えるからです。

2014年の活動の際には、団体による支援がうまく活かされないという現場に立ち会いました。広島市安佐北区のボランティアセンターが開設されたのが、災害発生から2日後の８月22日でした。その１日後に倉敷市社会福祉協議会が団体でボランティアを派遣しました。倉敷社協の職員に個人的に繋がりのある方がいたので連絡を取っていたのですが、「到着したらボランティアを断られたので引き返す」という連絡が届きました。当時ボランティアセンターでは個人でのボランティア受け入れを開始していたのですが、団体では受け入れないということでした。現場はまだ混沌とした状態だったので無理もないのですが、RQとしてはニーズ調査をすでに始めており、具体的な作業箇所のいくつかは見えてきている段階でした。そこで個別に連絡してすぐに引き返してもらい、団体で入っても問題ない道路での作業をお願いしました。復旧支援活動では、組織的な活動が必要とされますが、災害発生直後ではどうしても動きが遅くなったり、きめ細やかな関わりができなかったりすることがあります。RQの活動では、災害発生直後では特に、迅速できめ細やかな活動をすることが求められるということを感じる現場となりました。

次回は、2018年6月豪雨災害時での「うまくいかなかった」事例を紹介したいと思います。

2018年8月広島豪雨　倉敷からのボランティア支援

一般社団法人RQ災害教育センター
rq-center.jp

3.11伝承ロードを訪ねて

記憶を
受け継ぐ

第11回・陸前高田市立博物館
（岩手県陸前高田市）岩手 第3-020号

文＝多勢太一（一般社団法人陸前高田市観光物産協会）
千葉県船橋市生まれ。大学卒業後は都内の人材企業で法人営業の仕事に1年半従事。2020年9月に地域おこし協力隊として、岩手県陸前高田市に移住。現在は(一社)陸前高田市観光物産協会で「高田松原津波復興祈念公園パークガイド」や、同市における「みちのく潮風トレイル」の振興に携わる。

岩手県陸前高田市の「陸前高田市立博物館」は昭和34年1月に開館した歴史ある博物館で、半世紀にわたって陸前高田市の歴史や自然、文化などを発信してきました。しかし、平成23年3月11日に発生した東日本大震災津波によって博物館は全壊し、展示収蔵されていた貴重な資料も壊滅的な被害を受けました。その後、全国の専門機関による協力で、被災した資料約56万点のうち約46万点を救出し、現在も被災資料の安定化処理及び修理作業を継続しています。令和4年11月に開館した陸前高田市立博物館は、同じく東日本大震災で壊滅的な被害を受けた海と貝のミュージアム（平成6年開館）と合築される形で新設され、日本全国からご支援を頂いて復活した資料を通じて、来館者の方々に陸前高田市の歴史や自然、暮らしを伝えています。

陸前高田市立博物館の館内には、「宿命とともに生きる」という展示ルームがあります。この部屋では陸前高田市を襲った津波の歴史と教訓を紹介しており、様々な学びや気づきを得ることができます。展示の中で「三陸の海で暮らす私たちは、津波被害の歴史を学び、津波を正しく恐れ、津波から命と暮らしをどう守るか、を考え行動することが大切です。」という一文があります。私はこの一文に深い共感を覚えるとともに、昨今全国で増えている自然災害から尊い命を守るために、多くの方々に自分事として考え行動して頂きたいと心から願います。

度重なる自然災害から自分の身を守るには、あらゆる災害を予測して備えることが重要です。予測するためには、その土地固有の歴史や、地理・自然環境などについて知ることが必要です。博物館は、過去にその土地で発生した自然災害も含め、先人たちが築いてきた町の物語を知ることができる施設です。もし皆様のお近くに博物館がありましたら、立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

行って
みよう

陸前高田市立博物館
岩手県陸前高田市高田町字並杉300番地1
0192-54-4224
https://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/soshiki/kanrika/hakubutsukan

3.11伝承ロードの詳細は▶一般社団法人3.11伝承ロード推進機構
www.311densho.or.jp

支え合うために

被災地支援の進化 ～支援の個人的記憶を通じて～

第２回・2005～06年各地豪雨：災害ボランティアセンター支援の駆け出しと人材育成の本格化

文＝園崎秀治（オフィス園崎）

オフィス園崎代表。27年勤務した全国社会福祉協議会を2021年に退職、独立。多様な災害支援関係者との支援体制構築、防災・減災活動や、ボランティア・NPO・福祉専門職等による支援に関わり続ける。

www.officesonozaki.net

2004年10月、中越地震が発生しました。当時私は全国社会福祉協議会の総務部でボランティア活動保険を担当し、ボランティアが保険加入当日から活動開始できるよう保険会社と調整、大規模災害特例の運用を可能にするなど、後方支援的な業務をしていました。翌年、全国ボランティア活動振興センター（現・全国ボランティア・市民活動振興センター）で「災害担当」に配属され、ここから人生のライフワークが誕生するとは想像もしていませんでした。

この地震では支援者間の軋轢が頻発し、特に外部から支援に来た人間の、地元をないがしろにした強引な活動が問題になりました。そこで全社協主催で直近の支援に関わった各地の多様なセクターのキーパーソンを集めて会議を開きましたが、まだ互いを理解し合っていない場での議論は、時には被災地での軋轢を持ち込んだような状態で、協働とはほど遠い雰囲気の中で行われました。

災害ボランティアセンター（災害VC）の運営資金は、赤い羽根共同募金の災害等準備金を活用できる法改正がなされていたため、その運用を担う中央共同募金会を事務局に、任意の会議体組織「災害ボランティア活動検証プロジェクト会議（検証P）」を設置。全国の社協・共募・NPO・企業が膝を突き合わせて検証し、ひと・もの・資金の観点での被災地支援の仕組みが必要と結論付けました。これが後の「災害ボランティア活動支援プロジェクト会議（支援P）」に進化し、支援の実行部隊となっていきます。

左：2005年 宮崎県台風災害 高岡町災害VC　右：2006年 鹿児島豪雨災害

地元の社会福祉協議会が民間の支援拠点である災害VCを担う上で、本格的に災害VCの運営を支援する人材育成に取りかかるスタートの年でした。阪神大震災以来支援に関わり続けてきたNPO関係者の力を借り、社協職員を中心としながらも多様な人材で講師養成も視野にいれた徹底した詰め込み研修を開始しました。

異動して最初の2005年、不安の中初めて現地入りしたのが台風災害の宮崎県でした。翌2006年の長野県や鹿児島県の水害と、複数の災害VCの巡回を通じて強く重要性を感じるようになったのは、全国域から災害初動期に現地に入って支援の濃淡を見立てること、被災地の関係者に「全国からも見守って応援できる体制を用意している」というエールを送ることでした。

編集後記

今号(第45号)は本来10月発行予定であったものが、諸事情から制作作業が遅れ、年末のお届けとなりました。ご寄稿者、ご支援者および会員各位、そして読者の皆さまに心よりお詫び申し上げます。今後は定期発行を維持して参りますので、何卒よろしくお願い致します。2023年は国際的な紛争・戦争が大きな問題となるなか、それとは別に自然災害も各所で発生しました。もちろん両者は安易に比べられるものではありませんが、共通して大切なのは、私たちがその解決のために何ができるのかを考え続けることではないでしょうか。皆さまの年末年始が穏やかなひとときとなることをお祈りしております。（内田伸一）

震災リゲインプレスとは

東日本大震災の翌年、2012年創刊。震災をめぐる復興・支援・防減災の備えなど様々な情報をお届けする季刊フリーペーパー。創刊10年目を迎えたいま、改めて東北の情報を軸にした発信を目指して再スタートしました。過去号閲覧や会員登録ができるウェブサイトもあります。

NPO法人震災リゲイン

理事（五十音順）：相澤久美、内田伸一、大場健一、鬼本英太郎、日下部泰祐、佐々木豊志、関口威人、高木伸哉、田北雅裕、福井一朗

監事：渡部宏幸｜編集：相澤久美、内田伸一｜デザイン：八木直子

NPOの会員になる

あなたの力を貸してください 震災リゲインNPO会員募集！

NPO法人震災リゲインは、活動に賛同してくださる会員を募集しています。会費は各地への『震災リゲイン』送料等に充当させていただき、会員の皆様にも同紙をお届けします。周囲の人に手渡し読んでもらうことで、みんなで災害への備えを促進し、復興過程の被災地を支える活動に繋げましょう。各種ご質問は下記へ。

ご入会は⇒ shinsairegain.jp

会費は賛助会員／正会員一口250円／月から、
団体会員一口2,500円から。詳細は上記サイトから
「会員登録・寄付」をクリック。

【ご寄付のお願い】活動継続のためのご寄付も随時受け付けています。
ゆうちょ銀行　記号番号00160-6-387514　口座名：トクヒ）シンサイリゲイン
※他行からのお振込：店名 0一九（ゼロイチキュウ）店名019 当座0387514

ご意見、情報もぜひお寄せください　shinsairegain.jp

特定非営利活動法人 震災リゲイン『震災リゲインプレス』編集部宛

〒106-0044 東京都港区東麻布2-28-6

info@shinsairegain.jp　03-6277-7640　FAX 03-3560-2047

震災リゲインプレスは以下の協賛により発行しています。

Vision More vision, More success. 株式会社ビジョン

FREEing 株式会社FREEing www.freeing.co.jp

TOSMAX TOSMAX株式会社

IDD 東陽IDDセンター株式会社